2023年度　関西学院初等部　学校評価を終えて

関西学院では、2008 年度に初等部が開校して以来、初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携を取り、学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。2010 年度からは、幼稚園から大学院まで接続する学校園の先生方に、専門的な視点からのご意見を伺い、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。そして、創立 16 年目を迎え、一昨年度、本校の 1 期生が大学を卒業しました。今後、次々と卒業生を送り出し、これから幼小中高の総合学園としての一貫教育の成果が試されることになります。

2023 年度の初等部の取組は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導・学校行事」「生活指導」「研修（資質向上の取組）今年度研修テーマ“Mastery for Service”の体現～個が活きる関わり合い～」の４項目を重点項目として設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童、保護者、教員にアンケートを実施し（回収率①児童 98.3%、②保護者 75.0%、③教員 100%）、それぞれの立場からの回答を得ることにより客観性を確保するとともに、回答者個々の意見も重視するよう努めました。次に、アンケートの集計結果を分析するとともに、各重点項目についての初等部の取組状況を教職員が総括し、今年度の取組に分析、評価を加え、今後の改善の具体的方策を示し、初等部の自己点検・評価としました。さらに、それらについて接続する学校園関係者の関西学院中学部長、教育学部教授の専門的視点に基づくご意見を「第三者評価／学校関係者評価」とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、短大・各学校内部質保証部会において、初等部の学校評価が協議・承認されました。初等部は関西学院がめざす世界市民の育成にむけた全人教育の土台を培う大切な役割を担っていることをしっかりと自覚し、子どもたちが生涯にわたって“Mastery for Service”の体現をめざしていけるよう、児童の個が活きる関わり合いを教員が深め、保護者の理解と協力を得て、より質の高い教育活動を展開しなければなりません。関西学院初等部として、本学校評価を真摯にとらえ、教職員一人一人が自らの課題を探り、組織としてその課題解決に向かって取組を進め、今後もさらなる改革を図ります。2023 年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより、社会的信頼を高めるよう努めたいと考えています。

2024 年 3 月 15 日
関西学院初等部
校長　大西宏道

学校評価

教育理念・使命・目標

【教育理念・使命】
キリスト教主義教育に基づく全人教育の「はじめの一歩」を担う。
【目標】
キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである
“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。
【初等部聖句】
「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」
［意志］　［知性］　［情操］

2023 年度の評価項目

・キリスト教主義教育
初等部の教育の根幹をなすものであるため、評価項目として設定した。
・教育課程・学習指導・学校行事
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
・生徒指導
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているので、この項目を設定した。
・研修（資質向上の取組）
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

2023 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】	自己評価	A
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・今年度も毎朝の礼拝（こころの時間）を土台とし、各宗教行事、全学年週 1 時間の聖書科授業、またあらゆる教育活動を通して、児童・教職員が建学の精神、スクールモットー“Mastery for Service”を共有し、様々な教育活動の中でキリスト教主義教育を展開することができた。 ・特に新型コロナウイルスによる制限が緩和され、様々な行事がコロナ禍以前のように実施できるようになり、昨年度と比較してもより活発な活動が行えるようになった。 ・教育活動の中に定着した Zoom の利用により、様々な理由で欠席をしている児童が、自宅からも日々の礼拝に参加することができるようになった。 ・キリスト教主義教育の理念を保護者と共有する機会である全保護者対象の「聖書講座」（年 3 回開催）、PTA 活動との連携による「聖書と讃美歌に親しむ会」（各学年ごとに年 1 回、計 6 回開催）を、すべて対面で実施することができた。 ・教職員に対しては「キリスト教研修会」をはじめ、キリスト教主義教育について理解を深める機会をもち、キリスト教主義教育の担い手として、どのように		

	子どもたちと関わっていくべきかを継続して考えることができた。 （取組の効果に対する評価） ・児童アンケート問 2「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか」に対する肯定的な回答は 91.8%であった。「こころの時間（朝の礼拝）」における讃美、祈り、聖書、メッセージの一つひとつ、また授業における聖書の学びを多くの児童が大切と感じてくれており、児童の中にキリスト教主義教育が深く浸透していることが分かる。 ・児童アンケート問 3「“Mastery for Service ”（マスタリー・フォア・サービス）を大切にすることを心がけて生活していますか。」に対する肯定的な回答は 83.6%であった。子どもたちが、“Mastery for Service”を体現する生活を心がけていることは、児童アンケート問 16「学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。」、問 17「思いやりのある友だちが多いですか。」、問 18「友だちが困っていたら、助けていますか。」、問 19「友だちの意見や考えをよく聞いていますか。」、問 20「相手の気持ちを考えて行動することができていますか。」の肯定的な回答の割合が高いことからも読み取ることができる。また一方で平均約 10%の子どもが否定的な回答をしており、この子どもたちが日々の生活の中で“Mastery for Service”を大切にすることを心掛けて歩めるために必要な手立ては何かを改めて考えていかなければならない。 ・児童アンケートに関しては、高学年（5 年生、6 年生）になると各質問とも否定的な回答がわずかではあるが増えていく傾向があり、高学年の子どもたちへのより丁寧なアプローチが必要である。 ・保護者アンケート問 3「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている」に対しては肯定的な回答の割合が 97.5%と昨年度同様に高い数値を維持している。全保護者対象の「聖書講座」（年 3 回）、また学年ごとに開催している「聖書と讃美歌に親しむ会」（年 6 回）をすべて対面実施できたことが数値につながっていると思われる。時間的に来校が難しく Zoom で出席できないかという声が年々増えているが、対面で実施することの意味を大切にしながら、慎重に検討をしていきたい。 ・保護者アンケート問 4「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が 93.1%と昨年度よりも高い数値を示している。子どもの姿や学校の様々な働きかけを通して、保護者がキリスト教主義教育への理解と共に、その理念が浸透していることを感じてくださっていることが分かる。 ・保護者アンケート問 20「私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている」、保護者アンケート問 21「私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に共感している」、保護者アンケート問 22「学校は、「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が、それぞれ 100%、99.2%、93%と高い数値を示している。この数値から保護者もまたスクールモットー“Mastery for Service”の精神とキリスト教主義教育に十分理解をし、肯定的に受け止めてくださっていることが分かる。 ・教員アンケート問 1「私は、礼拝や研修を通してキリスト教教育の理念を共有している」に対する肯定的な回答は 100%と全員が肯定的な回答をしており、続く教員アンケート問 2「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している」との質問に対しても肯定的な回答が 100%となっている。教職員がキリスト教主義教育の理念を共有し、自らがキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもって初等部の教育の働きに取り組んでいることが分かる。

	・教員アンケート問３の「私は「“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成」を意識しながら教育している。」との質問に対しては、肯定的な回答が100％と全員がスクールモットーを意識しながら、日々の教育活動を行っていることが分かる。
今後の方策	・関西学院の教育の土台であるキリスト教主義教育をさらに浸透、展開していくために、何よりも教職員が様々な機会に理念を確認、共有しながら、児童や保護者と関わっていくことを大切にしていく。 ・前年度と比較しても全体的に肯定的な回答の割合が高かった。しかし、このことに満足せず、否定的な回答から自分たちに何が足りないのかを考え、学校の歩みに生かしていく工夫・努力を続けていく。 ・児童のみならず、様々な媒体を通して、キリスト教主義教育の理念を共有し、在校生の保護者、入学を希望する保護者にもキリスト教主義教育の意味を理解していただけるようにする。

2023年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導・学校行事 【真理を探究する確かな学力の育成】	自己評価	B
目標	「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握の上の学習指導」「豊かな情操を育む芸術文化活動」を目指す。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・新型コロナウイルス感染症の５類感染症移行に伴い、前年度の活動に加えて宿泊行事（3年から6年）を復活させた。ただし、6年のカナダ・コミュニケーション・ツアー（以下CCT）に関しては次年度以降に持ち越しとなった。 ・宿泊行事を充実させたものにするため、現地に下見に向かったり、三田キャンパスや千刈キャンプ場の方にお越しいただき話し合いを進めたりと精力的に動くことができた。 ・前年度に引き続き国語、算数、体育の教科部会を毎月実施した。検討内容としては、期末テストの観点別の評価の共有、体育祭の開催時期の検討などを行った。 来年度の年間計画策定においては、CCT再開（5月下旬）により、音楽祭を10月、体育祭を11月に実施することとした。 ・KGSO（関西学院スポーツオムニバス）を全学年で復活させた。ただし、年１回の開催としたため、次年度以降開催時期、回数の取り決めを行っていく。 ・昨年度に引き続き、児童にどのような資質・能力を育てていくのか、初等部内で共有し、校内の授業研修を行った。 ・昨年度に引き続き、２月に学校公開会を人数を限定して行うことにしている。 ・臨時休業時や欠席が続く児童に対してオンライン授業を実施した。また、学級閉鎖や学年閉鎖時の具体的なオンライン授業の進め方について共通認識を図った。 ・算数の記述テストの観点を共有し評価につなげていくよう算数部会で議論し修正を図った。 ・学習の相対的な到達度を把握するための実力テストを実施した。また、学力不振児童に対しては算数の補習を行い、学習習慣の定着と学力の向上を図った。 ・補習対象児童とは別に、中学部への進学を注意喚起するために５年生以上の学力不振の児童並びに保護者を対象に面談を行った。		

	（取組の効果に対する評価） ・児童アンケート問 1「学校は楽しいですか。」では、肯定的評価が 89.0%（前年度 88.7%）であった。これは、長引くコロナ禍の中、制限された学校活動や行事から以前の自由に活動できるものに変わってきたものの、友だちとのより深いかかわりがまだ不足していることが考えられる。このことは、児童アンケート問 7「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」において、前年度 87.1%から 80.8%と 6.3 ポイントを下げていることにつながっている。自由に自分の考えを伝えられる教室環境にしていくだけなく、心の殻を打ち破って話し合える学級経営や授業の指導法の改善が急務である。 ・児童アンケート問 13「タブレットを使って学習に役立てることができますか。」では、前年度 97.1%から 93.8%と 3.3 ポイントを下げている。前年度より iPad を利用する教室環境を整えたが、家庭と連携して iPad を有効活用できるよう教員側からの働きかけをしていかねばならない。 ・保護者アンケート問 1「子どもは、学校に行くのが楽しいと感じている。」では前年度 92.0%から 94.1%と 2.1 ポイント評価を上げている。コロナ禍以前の教育体制に戻ってきたことを実感するだけでなく、本校の教育活動に理解を示しているものと確信している。 ・保護者アンケート問 8「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」では肯定的評価が 89.7%（前年度 90.5%）、保護者アンケート問 9「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」では肯定的評価が 90.9%（前年度 88.9%）と、ほぼ前年度と同じポイントになっている。身につけるべき基礎・基本的な学習内容の定着や、補習授業での学習内容の定着を図る取組に、一定の理解を引き続き得られていると考えられる。しかし、児童アンケートを踏まえた上では決して満足いくものではない。児童一人ひとりにさらに目を配り、育てたい資質・能力を保護者の方にも明確にしていくことが重要である。 ・教員アンケート問 3「私は、「“Mastery for Service ”（マスタリー・フォア・サービス）を体現する世界市民の育成」を意識しながら教育している。」については、前年度に引き続き 100%の肯定的評価となっている。我々のスクール・モットーである“Mastery for Service”の原点に立ち返り、他者と共に歩み、本当のやさしさと思いやりをもって自らを社会と人のために用いることのできる人を育成していくために、教育活動ならびに様々な学校行事を通して児童に意識づけできたと考えている。 ・英語については昨年度に引き続き、「毎日英語に触れる」ということを前提に、日本人教員、ネイティブ教員あわせて 8 人態勢で取り組んだ。そのため、教員アンケート問 9「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」について、前年度 75.9%から 90.6%と 14.7 ポイントと大幅に評価を上げている。担任も含めて全員で児童に英語教育を触れさせていこうとする気概を感じる。 ・算数教育について、教員アンケート問 10「学校は、算数の時間を通して、日常の事象を数理的に考える力を育てるとともに、基本的な技能を定着させている。」について、96.6%（前年度 82.7%）が肯定的評価になっている。しかし、保護者アンケート問 12「学校は、算数の時間を通して、日常の事象を数理的に考える力を育てるとともに、基本的な技能を定着させている。」では、肯定的評価が 86.7%になっており、9.9 ポイントの差がある。これらについては、学校の 4 つの柱の一つである、「全員参加・全員理解（ユニバーサル）」を今一度全

	教員が共有し、児童に還元していくことでその幅を狭めていきたい。
今後の方策	・前年にとらわれることのない学校行事の運営。（集団宿泊的行事・学芸的行事・体育的行事・遠足的行事など） ・昨年度に引き続いて中学部との連携の強化。（特に算数） ・昨年度に引き続き、子どもたちの資質・能力をどのように育てていくかを念頭に置きながら、児童をどのように見取っていくかの議論の継続。（各教科単元末テスト、期末テストの在り方、評価の在り方） ・国際交流（インドネシア・韓国など）の継続とさらなる充実。

2023 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	生活指導 【初等部に関わる全ての人が楽しく幸せに過ごせる学校生活】	自己評価	B
目標	児童が社会の一員として責任ある態度を持ち、学校生活のきまりを守ることができるようにする。そのために、学年の発達段階に応じた自己判断を促すようにする。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・昨年度同様、教員による立哨を下校時に行った。信号待ちの児童に対し、飛沫感染予防という観点で「話さない」という指導を行ってきたが、5 類に移行されたことに伴い、「静かにする」というようにポイント絞った指導を徹底して行うようにした。土曜時程など一斉下校になる場合は、担任団による手塚治虫記念館前までの下校を指導を行うようにした。 ・登校時、苦情の多い地点に絞り、学事委員会の教員が立哨を行った。 ・校長室会や教師会、朝の職員朝礼において、日々の生活指導の案件や児童の様子を教員に伝え、全員で生活指導に当たるという意識をもってもらえるようにした。 ・生活安全委員会の児童と連携して、休憩時間のグラウンドの使い方、校舎内での過ごし方、挨拶の仕方など、児童の自治で校内生活が豊かになるような工夫を行った。 ・避難訓練は火災（11 月）、地震（1 月）の 2 回、様々な災害に備えて行った。地震避難訓練は、その日のうちのいつ訓練が始まるか分からない状況で実施し、不測の事態にどう対処すればよいか考えられる訓練とした。 （取組の効果に対する評価） 〈児童アンケートの結果から〉 ・生活指導の観点である「学校のきまりを守ること」について、児童アンケート問 14「学校のきまりを守って生活していますか。」に対する肯定的な回答は 87.0%（前年度 87.4%、前々年度 89.5%）であった。この項目に関しては前年度を 0.4 ポイント,前々年度を 2.5 ポイント下回る回答を示しており、児童の意識の低下が見られた。本年度における指導の徹底の不十分さが示された。 ・生活指導の観点である「元気よく挨拶をすること」について、児童アンケート問 15「だれにでも元気よくあいさつしていますか。」に対する肯定的な回答は 83.4%（前年度 89.3%、前々年度 88.7%）であった。この項目に関しては前年度を 5.9 ポイント下回る回答を示しており、マスクを外した生活が戻ってきたにもかかわらず、このような結果になったことは、我々教員の指導が不足していたということは否めない。		

	〈保護者アンケートの結果から〉 ・保護者アンケート問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて、適切な指導をしている。」に対する肯定的な回答は 86.2%（前年度 88.1%）であった。前年度に比べて 1.9 ポイント下回っており、児童アンケートの同様の項目の回答から考えて、保護者も感じていることがうかがえる。 ・保護者アンケート問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」に対する回答は 81.5%（前年度 86.6%）であった。前年度から 5.1 ポイント下回っており、「あいさつ」に関して、問 15 の児童アンケート同様、児童の意識の低下が保護者にも伝わっていることがうかがえる。 〈教員アンケートの結果から〉 ・教員アンケート問 13「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」に対して、96.9%の肯定的な回答が見られたが、児童や保護者における同様のアンケートに対する回答では、10 ポイント程の差があり、教員が十分に行っているという意識が児童や保護者に伝わっていない現状がある。 ・教員アンケート問 14「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」問 15「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」問 16「私は、一人ひとりの子どもが安心して学校生活を送れるように、配慮、指導している。」は、肯定的な回答が 100%であった。しかしながら、児童アンケート問 16「学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。」問 17「思いやりのある友だちが多いですか。」問 18「友だちが困っていたら、助けていますか。」に対する肯定的な回答がどれも 100%に達していなかったことから、指導を行ったが、十分にできなかったということと思われる。よって、十分に指導できるように、学年団や管理職に協力を得ながら、引き続き指導に当たる必要があると思われる。
今後の方策	・「学校のきまりを守ること」に関しては、教員の意識を統一させるために、校長室会や教師会で繰り返し児童の実態を伝えつつ、事前に全員で指導ができるようなアナウンスを増やしていく。教員からの指導と児童同士の呼びかけによる指導を併用しながら、さらに児童の意識を高められるように指導を行っていく。また、状況を児童に伝えることに加えて保護者にも伝わるように積極的にアナウンスをしていく。 ・「良好な人間関係」や「児童の安心できる学校生活」に関しては、アンケートの結果を教員全員で共有し、指導が児童や保護者にとって十分ではない部分もあるということを意識できるようにする。 ・「あいさつ」については、挨拶をすることで相手に気持ちを伝えられるようにしていくことの重要性を伝えるような指導を、児童同士の呼びかけも取り入れながら継続的に行っていく。

2023 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	研修（資質向上の取り組み） 【“Mastery for Service”の体現 ～「個」が活きる関わり合い～】	自己評価	B
目標	「他者と対話し共感する能力」を持ち「よりよい世界を創造」することが我々のミッションであり、“Mastery for Service”を体現する鍵となる。教員の対話と共創の場づくりを行い、教員の絶えざる変容によって、スクールモットーを体現		

	する初等部の子どもたちの育成をめざす。
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・＜公開授業＞　各学年団の代表１名が授業公開する「大授業」を実施。事前検討会は学年で行い、事後研修会は全教員が参加。その他、全教員が一人一公開で「小授業」を行い、それぞれ実践記録を提出することとした。 ・＜キリスト教研修＞　本校宗教主事よるキリスト教主義教育の講話を聞き、要点について整理した後、各グループで討議を行った。 ・＜危機管理研修＞　外部講師による救急措置に関する講話を聞き、日常でできる具体的対応方法を確認した。 ・＜読書会＞　任意参加型で、幅広い読書体験を共有する場を提供した。不定期開催。 ・外部講師による「個別化・個性化研修」を対面で開催。「個」に応じた指導や支援に関する認識を深めた。 ・外部講師による「子ども理解研修」を対面で開催。「個」に関する理解や「個」を見取るということに対しての理解を深めた。 ・外部講師による「多様性理解」を対面で開催。対話による組織運営や多様性を担保する考え方について理解を深めた。 ・＜教科部会＞　教務委員会と連携を図りながら教科部会を開催した。各教科についての理解（資質・能力、評価等）を深めた。 （取組の効果に対する評価） ・児童アンケート問 6「授業はわかりやすいですか。」の肯定評価は 88.7%（前年度 88.8%）、否定評価も 11.3%（前年度 11.3%）とほぼ同様の傾向がある。しかし、児童アンケート問 4「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」、児童アンケート問 5「授業は楽しいですか。」の肯定評価はそれぞれ 89.3%（前年度 92.8%）、85.6%（前年度 88.8%）と減少している。教員側の工夫としてわかりやすい授業はされているが、児童からみての楽しい授業、学ぶ価値のある授業づくりができるような研修を進める必要があると考えられる。 ・児童アンケート問 17「思いやりのある友だちが多いですか。」の「強くそう思う」が、51.1%(前年度 55.2%)と下降している。反面、児童アンケート問 20「相手の気持ちを考えて行動することができていますか。」の「強くそう思う」も、31.9%(前年度 32.2%)と下降している。子ども達のよりよい関わり合いのある授業を中心とした研修を進め、児童間の関係性の向上を目指すべきだと考えられる。 ・保護者アンケート問 8「学校は、基礎的知識や技能が定着する授業を行っている。」では、肯定評価が 89.7%（前年度 90.5%）と高評価となっている。また、保護者アンケート問 9「学校は、基礎的知識や技能を活用する場面を取り入れた授業を行っている。」における肯定評価も 90.9%(前年度 88.9%)と上昇している。これは、知識の獲得だけでなく、獲得した知識を活用しようという思考力や判断力の育成を意識した評価テストを作成するなど、教員の授業の評価方法の変化や授業方法の工夫が影響していると考えられる。 ・教員アンケート問 12「私は、ICT 機器を有効に活用している。」の「強くそう思う」が 50.0%（前年度 41.4%）「あまりそう思わない」が 9.4%（前年度０%）となっている。有効活用できている教員とそうでない教員の差が出てきたように感じる。 ・教員アンケート問 17「私は、研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開

	授業を実施している。」問 18「私は、授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。」の肯定評価がそれぞれ 87.6%(前年度 79.3%)、93.8%(前年度 79.3%)と上昇している。これは、本年度の研修テーマにおける対話や取り組み方の具体的な方法を共有できたことや、各教員の授業に対する意識が高まったためと考えられる。
今後の方策	・新学習指導要領における各教科のねらいや教科の本質的な解釈の具体化に、教務委員会と共同して取り組む。 ・他者からのフィードバックを得ることを通して自身の授業や実践を見なおす機会を設けるために、年間一人一授業公開を継続する。 ・客観的に分析的に連続的に児童理解を進めるために、児童の記録を取り続け、学年間で共有できる場を設定する。 ・外部講師を招聘し、学習者理解等のテーマに沿った研修を進める。 ・各学年における協働研究の場をに設定し、計画的に進められるようにする。 ・研修テーマを明確にし、そのテーマに沿った対話を教員内で行う機会を設ける。

（自己評価）

A＋=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

○本年度も毎朝の礼拝（こころの時間）を土台として、様々な宗教行事や聖書科授業を行ってきた。そのことが、キリスト教主義教育に対する児童や保護者の高い評価につながっている。

○新型コロナウイルス感染症による制限が緩和され、キャンプなど各種学校行事を再開することができた。また、新たに韓国の小学校との相互訪問を開始し国際理解の充実を図った。来年度は台湾の小学校との交流も計画している。児童・保護者ともに授業のわかりやすさについて高い評価をしている。今後は初等部教育の柱である「全員参加・理解の授業」を一丸となって進め、さらに評価を高めていく。

○児童の様子を情報共有する場を数多く設けて、生活指導に生かすことができた。挨拶に関してはその意味を学年に応じて継続的に伝える必要性を感じる。また、きまりを守ることに関しては教員の指導と児童同士のよびかけを併用し、児童の意識を高めていく。

○研修テーマについて語り合う場を増やしたことで、各教員の授業研究への意識が高まった。また、授業研究以外に、キリスト教・危機管理・子ども理解・学級経営・ICT など現在必要と考えられる内容に関する様々な研修を行った。

○本年度も、児童アンケート問 1「学校は楽しいですか。」、保護者アンケート問 2「初等部の教育には満足している。」で高い肯定的評価を得た。今後もキリスト教主義教育を土台とした全人教育をより強く意識して展開していく。

2023 年度の評価をふまえて 2024 年度に予定している評価項目、テーマ等

○ キリスト教主義教育
○ 教育課程・学習指導・学校行事
○ 生徒指導
○ 研修（資質向上の取組）

第三者評価／学校関係者評価

〇全体として、アンケート結果から得られた評価材料に対して真摯に向きあい、それをもとに誠実に自己点検を行った自己評価となっています。特に、肯定回答が昨年度比マイナスであったアンケート結果が示す問題点に対して、教職員が一致して改善を探ろうとする姿勢が評価できます。
〇算数教育を含む学習指導面において、単に学力向上を目指すだけではなく、児童のどのような資質・能力を育てるのかという視点のもと、校内の授業研修が今年度も精力的に行われた点が大変優れています。
〇あいさつの励行や学校の決まりの遵守といった生活指導面での問題点が認識されていますが、当評価者が初等部を訪問した際には元気な声であいさつをしてくれた児童が多い印象でした。あいさつを含む学校生活の在り方に関しては、教員による根気強い指導と自ら率先垂範する姿が引き続き重要だと思われます。
〇キリスト教主義の精神やスクールモットーの浸透については、昨年度までと同様、児童・保護者・教員のすべてにおいて高い実績が示されました。高学年児童が規範的なものに反発するのは成長過程における一段階として理解する視点も大切だと思われます。総じて関学の一貫教育の柱としての心の教育が、丁寧に、また順調に推し進められています。

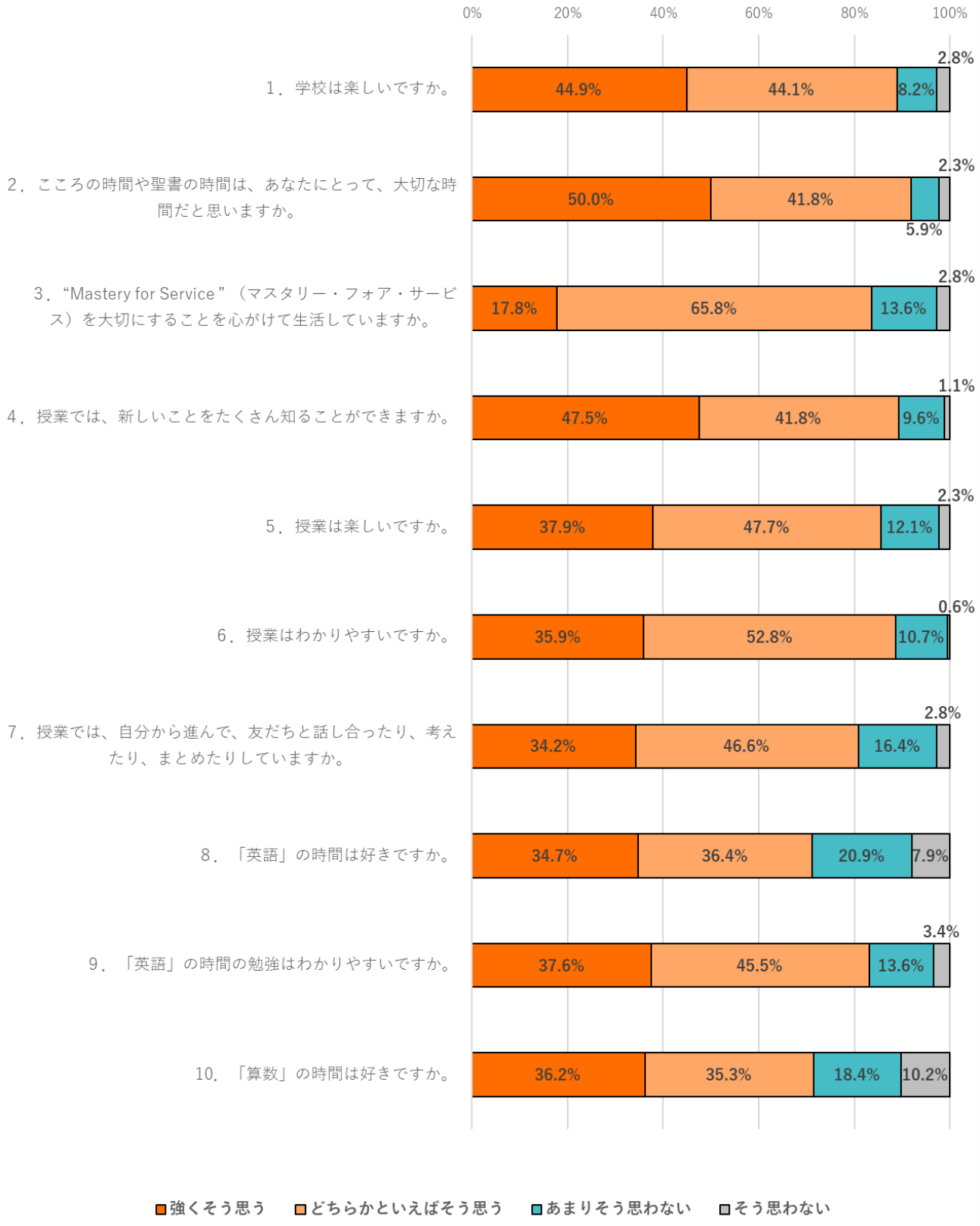
第三者評価／学校関係者評価

全体として、各評価項目の取組に対して、アンケートの実施、及びその結果の分析をもとに、非常に丁寧に自己点検・評価がなされている点、そして、キリスト教主義教育を土台とした全人教育の実施により、多くの点で高い評価を得ている点について大変評価できます。なお、アンケートで否定的回答の割合が高い項目についは、次年度以降に肯定的割合が高まるような試みが期待されます。

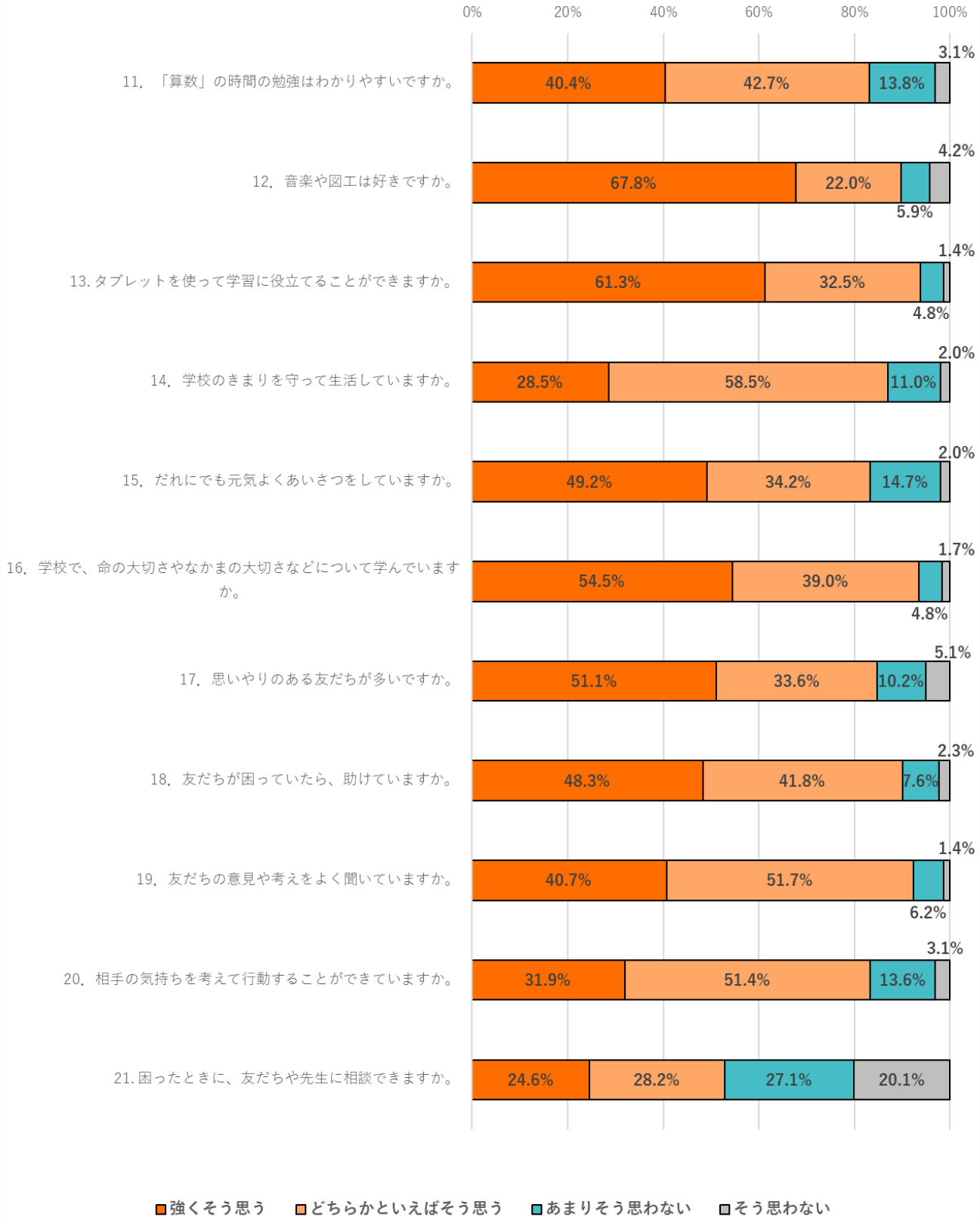
キリスト教主義教育については、活発な活動がなされたことなど、積極的な活動が展開されたことが高く評価できます。アンケートにおいても肯定的回答の割合が高い項目が多く、学校全体にキリスト教主義教育が浸透していることは大いに評価できます。アンケートにおいて、否定的な回答が若干みられた児童の“Mastery for Service”の心掛けなどについて、今後よりよい工夫が期待されます。教育課程・学習指導・学校行事については、国語、算数、体育の教科部会の毎月の実施、学習の相対的な到達度を把握するための実力テストの実施など、よりよい改善をめざした様々な取組が実施されたことは大変評価されます。そして、各取組についてのアンケートの肯定的評価も高いことが大いに評価ができます。ポストコロナの時期における、先の見えない時代の新たな課題に、臨機応変に対応していくことが、今後も期待されます。生徒指導については、登校時や苦情の多い地点に絞った学事委員会の教員の立哨、火災、地震の避難訓練など、工夫をされた指導がなされていることが高く評価されます。アンケートで肯定的な回答の割合が多く、的確な指導の実施がなされていることわかることが大変評価できます。前年度を下回る項目については、各項目について現状を上回る結果となる指導の模索が期待されます。研修（資質向上の取組）については、全教員が一人一公開で「小授業」の公開授業の実施、外部講師による「個別化・個性化研修」「子ども理解研修」「多様性理解」などの多様な研修を実施するなど、教員の資質向上を図る充実した研修が多数なされていることが大いに評価できます。アンケートの肯定的回答の割合が高く、研修が効果的に実施されていることがわかることが高く評価できます。今後の方策の実施により肯定的回答の割合がより高まることが期待されます。

2023 年度学校評価

2023年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・児童（回答率 98.3%　回答354人/対象360人）

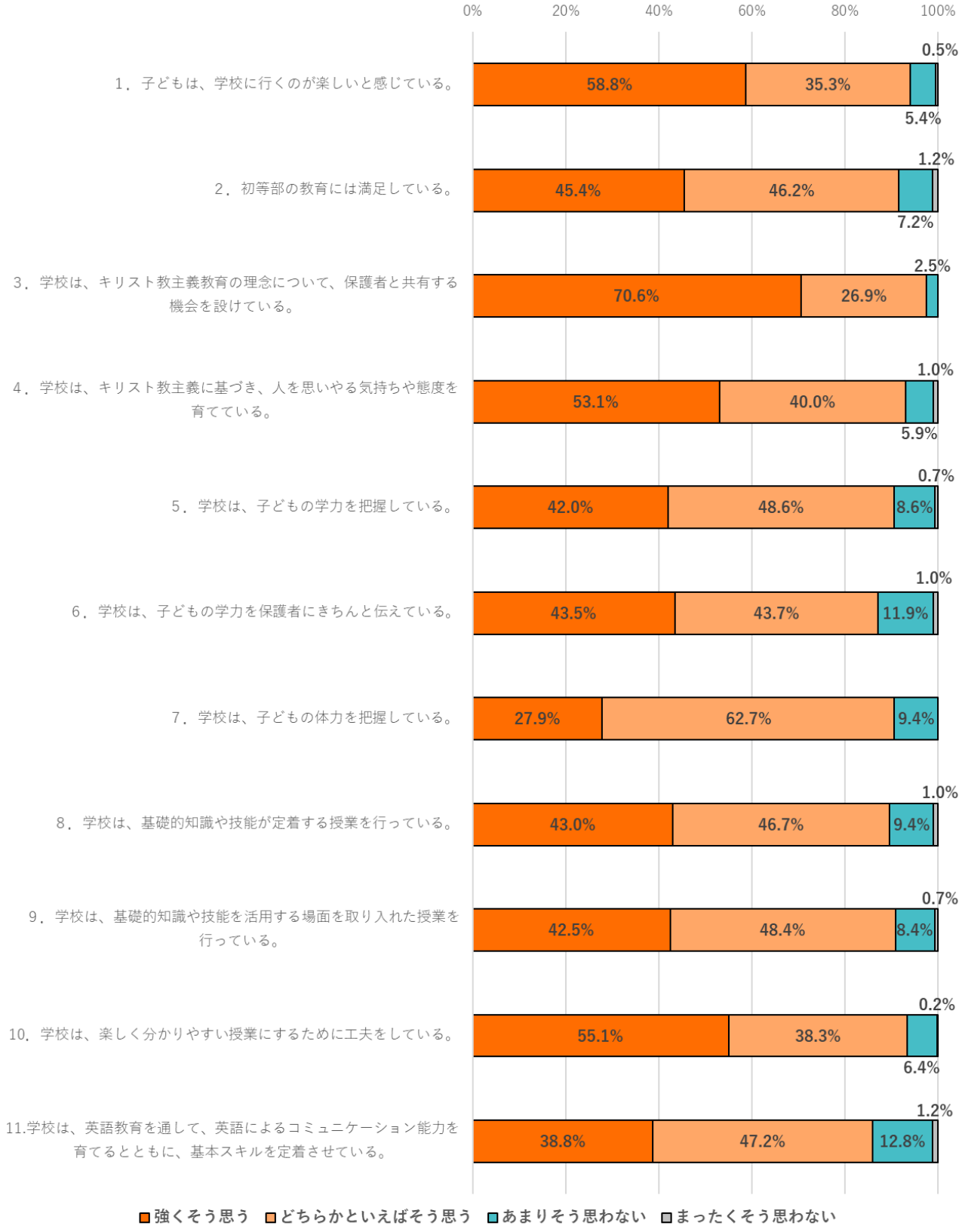


2023年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・児童（回答率 98.3%　回答354人/対象360人）



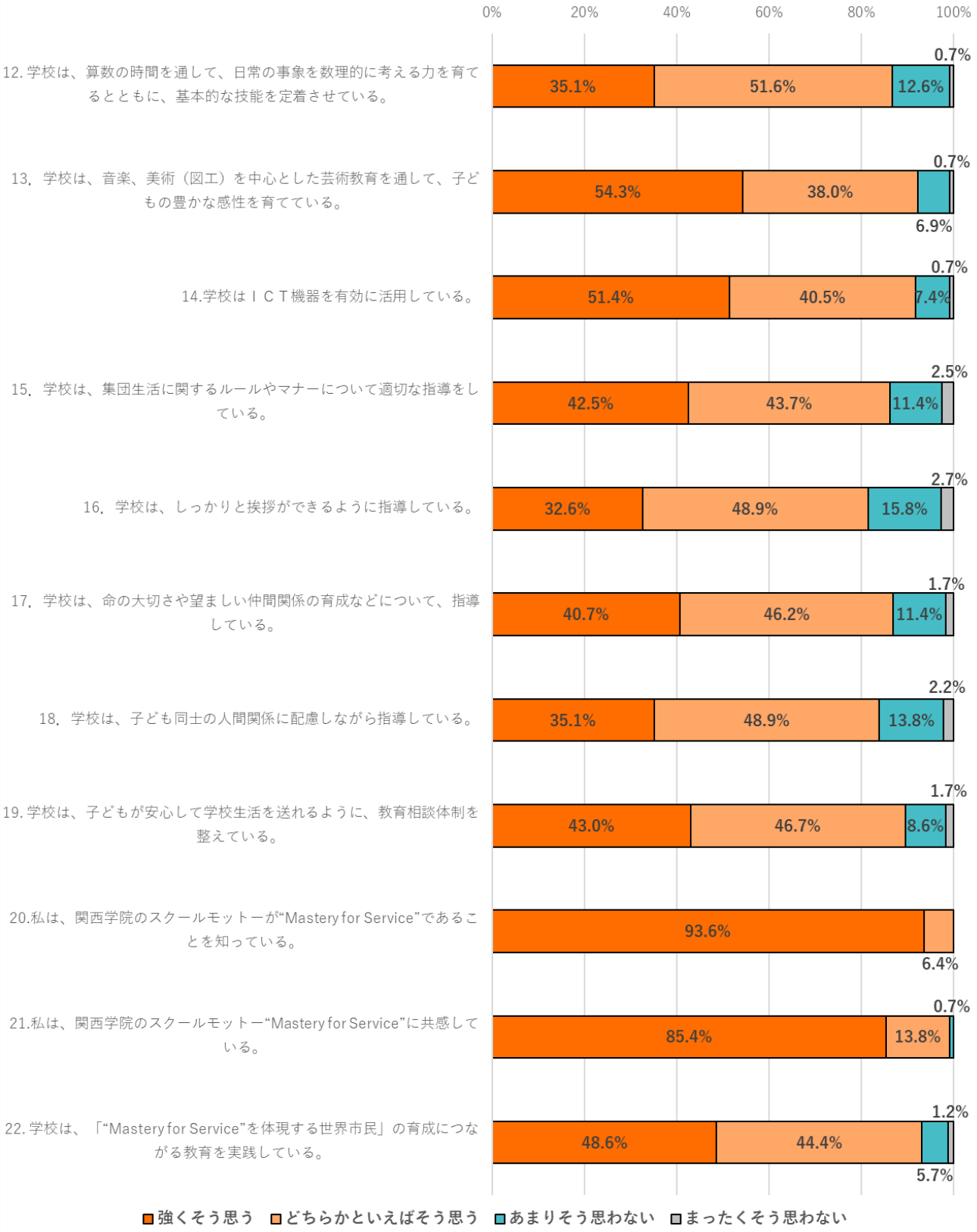
2023年度　学校評価アンケート集計結果

初等部・保護者（回答率 75.0%　回答405人/対象540人）

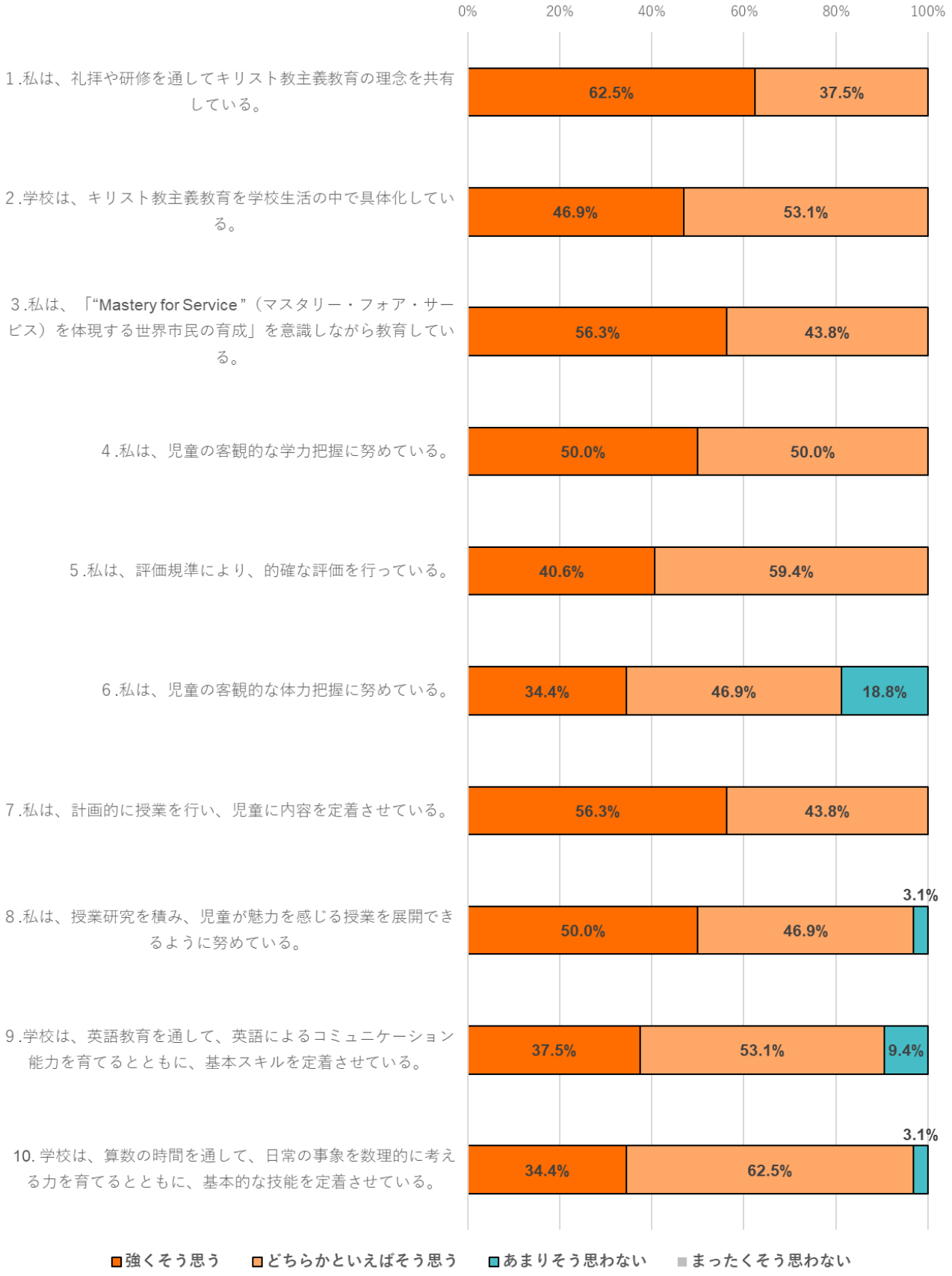
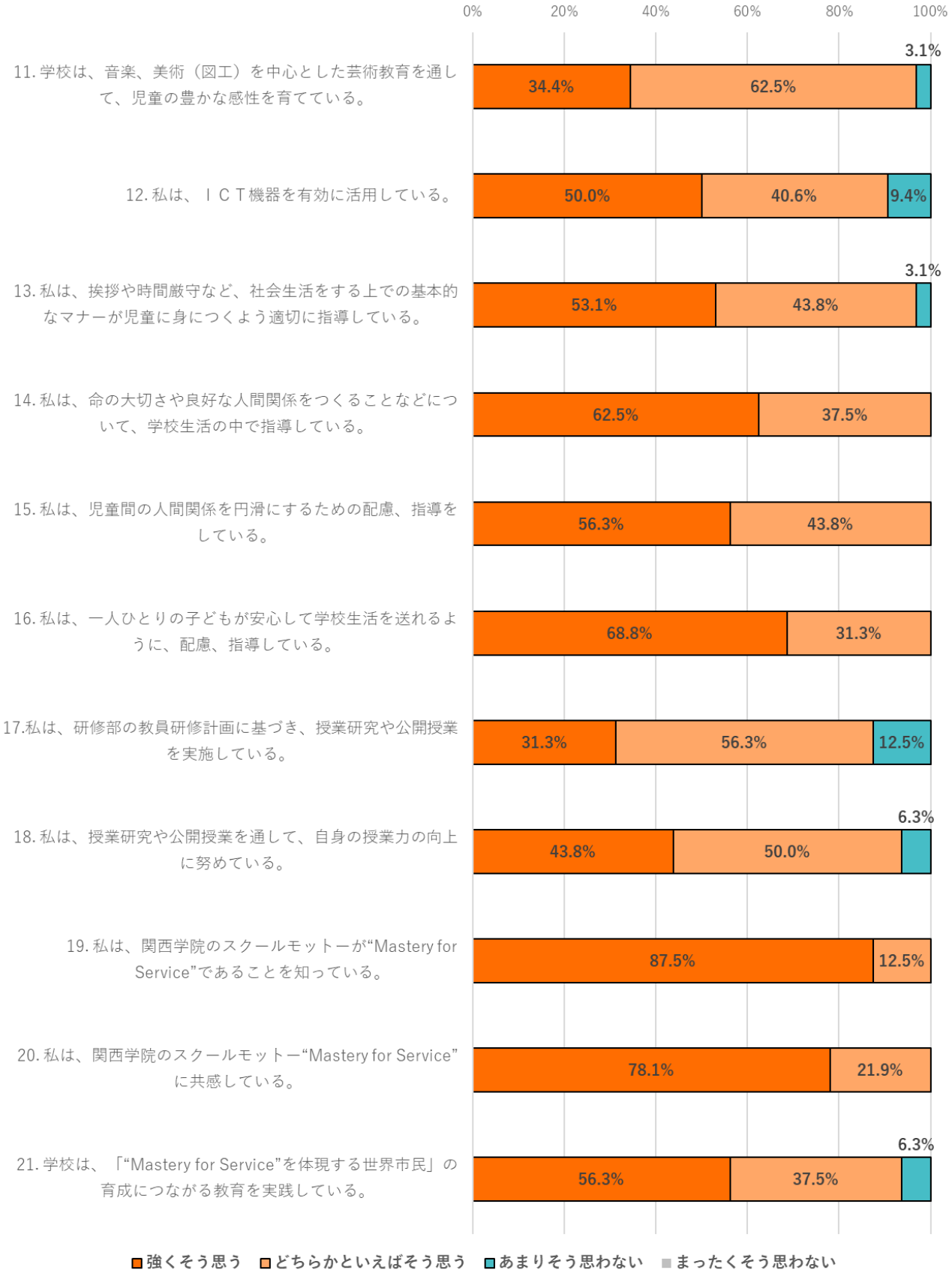


2023年度　学校評価アンケート集計結果

初等部・保護者（回答率 75.0%　回答405人/対象540人）



2023年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・教員（回答率 100%　回答32人/対象32人）



2023年度　学校評価アンケート集計結果
初等部・教員（回答率 100%　回答32人/対象32人）